

第4章 大阪府立四條畷高等学校昭和42年度

飯盛城跡発掘調査の意義

第1節 四條畷高等学校地歴考古学クラブの歴史

大阪府立四條畷高等学校に考古学クラブが誕生したのは、昭和25年4月のことであった(第1期)。クラブでは顧問片山長三の指導により四條畷市更良岡山遺跡や枚方市田口山遺跡、同穂谷遺跡などの調査を行っており(大阪府立四條畷高等学校記念誌委員会編2006)、昭和20年代の日誌の写しによれば、昭和28年12月25日と、29年3月～4月に飯盛城跡の調査もおこなっていた。

その後、昭和36年度の3年生引退で一時クラブは休眠状態にあったが、昭和39年4月に山口博を顧問に迎え、坂元直哉を中心に地歴考古学クラブ(当初は同好会)として復活した(第2期)。のちに昭和51年度の3年生引退による二度目の休眠期を経て、昭和54年に再復活し、途中1年ほどの休眠期間を幾度か挟みながら平成9年度まで活動していた(第3期)。

第2節 クラブによる飯盛城跡調査

第2期には坂元を中心に精力的に飯盛城の調査研究を行い、その成果は部誌『古流』にまとめられ(四條畷高校地歴考古学部1965・1966)、坂元により学会にも報告された(坂元1967a、b、1968)。

その研究の大きな成果は、縄張りの配置を図面とともに報告したことであり、以後の研究の礎となった。調査は現地での実測を伴う高い精度のもので、初めて主要部以外の東西の尾根にのびる曲輪群を曲輪として認識した。また、東側に城門や井戸を認識し、図面とともに報告した。

坂元の卒業後もクラブでは飯盛城の調査を継続し、昭和42年には5月と12月に「東の丸一の曲輪」において発掘調査を実施した。翌年に報告書をガリ版刷りで刊行しており(東の丸調査報告係編1968・本書付編1)、後に部誌において報告がなされた(岩田・江藤・出口・藤原1969・本書付編2)。調査スナップ写真、調査日誌、出土遺物の一部が現在も四條畷高校社会科教室に保管され、内容を知ることができる。それらによれば、調査は5月3日と12月16日～22日に行われた。5月の調査はトレンチの規模と断面図を記録しており、地表下約30cmで「花崗岩風化物」を確認し地山と認識した。刀の目貫とみられる銅製品(本書26頁第10図-71)が出土し、注目に値する。12月にはトレンチ2カ所を設け、それぞれ一辺1mの正方形グリッドを設定し、掘削は深さ5cmごとに人為的に土層を分割し、グリッドと土層ごとに遺物を取り上げ、出土位置を記録した。図面に「垂心」の記載があり、平板を用い測量していた。最終的に地表下約30cmで花崗岩風化土を確認したが、そこからも土器が出土したことを今後の課題として報告した。出土遺物も一部略図と計測値を載せ報告しており、土師器・瓦質土器を含む土器片352、瓦片9、鉄釘34、白磁1、貨幣1のほか、円筒形の銅製品(本書25頁第9図-59)や、煙管(本書25頁第9図-58)などが出土した。これ以前の踏査採集遺物も略図とともに報告し、その中に土器とともに採集した銅銭(本書26頁第10図-79)、刀の鐔部分の金具である切羽とみられる銅製品(本書26頁第10図-78)などが含まれていた。また、「廃御机神社」採集とされるものが数点あり(本書28頁第12図-90～94)、実物には墨書きの注記があるため昭和20年代採集品の可能性がある。これは江戸期の南野村文書に「飯盛山二ノ丸に鎮座」とされる(山口1990)、飯盛山北麓の字宮谷で採集したものと考えられる。

こういった中で部活顧問である山口博が坂元と共同で研究発表を行い(山口・坂元1967)、引き続いて自費出版の四條畷町史と(山口1968)、四條畷市制施行後の市史に成果を掲載し(山口1972)、城跡の内容が広く知られるようになった。

第2表 大阪府立四條畷高等学校地歴考古学クラブ年表

年	出来事
昭和23年(1948)	片山長三氏を中心に、考古学クラブの前身となる「葉柏会」結成
昭和25年(1950)	4月 考古学研究クラブ結成 機関誌『古流』(1期)
昭和28年(1953)	地歴クラブ結成 機関誌『郷土地誌』
昭和36年(1961)	3月 3年生卒業で地歴クラブ休部
昭和37年(1962)	3月 3年生卒業で考古学研究クラブ休部
昭和39年(1964)	1月 有志により地歴考古学クラブ準備委員会設立
	4月 坂元直哉氏を中心に、旧地歴クラブと旧考古学研究クラブを合同して、地歴考古学同好会として復活 顧問 山口 博 氏 (2期)
昭和40年(1965)	1月 31日に小松寺跡を調査
	4月 地歴考古学クラブに昇格
	6月 『古流』1号刊行
	7月 更良岡山遺跡発掘調査
昭和41年(1966)	2月 『古流』2号刊行
	7月 更良岡山遺跡発掘調査
昭和42年(1967)	12月 飯盛城跡東ノ丸1の曲輪(曲輪31)発掘調査
昭和43年(1968)	8月 更良岡山遺跡発掘調査
	10月 『古流』3号刊行
昭和44年(1969)	10月 『古流』4号刊行
昭和45年(1970)	10月 『古流』5号刊行
昭和46年(1971)	10月 『古流』6号刊行
昭和47年(1972)	10月 『古流』7号刊行
昭和48年(1973)	10月 『古流』8号刊行
昭和49年(1974)	9月 『古流』9号刊行
昭和50年(1975)	9月 『古流』10号刊行
昭和51年(1976)	3年生引退で12月までに休部
昭和54年(1979)	地歴考古学クラブ復活(3期)
昭和58年(1983)	部員1人となる
昭和59年(1984)	休部
昭和60年(1985)	4月 地歴考古学クラブ復活
平成6年(1994)	部員全員が社会科学部と兼部し活動低調に
平成7年(1995)	休部
平成9年(1997)	7月 部員追加入部との記録あり
平成10年(1998)	休部
平成12年(2000)	正式に廃部

第3節 クラブによる調査の意義

四條畷高校の生徒による飯盛城跡の調査の特徴は、学生を主体とした活動でありながら、考古学的にみても十分な情報を得ていることである。飯盛山の主尾根以外にも城跡の曲輪が広がることを初めて確認し、報告したのはこれらの学生たちであった(四條畷高校地歴考古学部 1965・1966)。図化を伴うことで客観的具体的な報告が心がけられており、現代考古学の視点からみても価値の高い報告であると言える。山頂付近が木々で覆われる以前の記録として、また NHK 飯盛山 FM 送信所が建設される以前の状況を示す資料として貴重な内容を含んでいる。

なかでも昭和 42 年 12 月の発掘調査は、当時考古学分野で標準だった平板測量の手法で調査地区の図化をおこない、人工的に層序を分けることで部員間の土層観察経験の浅深を克服し、遺物出土位置と層位が細かく記録されていた。その出土遺物は、来歴の知らない資料や、出土地が伝聞されたのみの資料とは異なり、出土位置や状況が正確にわかる第一級の考古学資料と言えるだろう。

これらの資料を用いることで、現代の高校生たちによる研究により、新発見が明らかとなった。その内容は、第 5 章および 6 章に掲載した論考のとおりである。これまで飯盛城跡ではⅧ郭より南が居住空間、Ⅰ郭より北が軍事空間と認識されてきた（中井 2013 等）。しかし、第 5 章で述べられているように、軍事空間として認識されてきた北側の曲輪群の、主要域から東側に枝状にのびる曲輪群においても、武士層による生活痕跡が残されることが判明した。出土した白磁や天目茶碗（本書 24 頁第 8 図-31・32）の存在から、一定の地位を持つ人物（「位の高い武士」）の存在が想定される。これについて文献面から検討をおこなったのが第 6 章で、そこに述べられているように、三好長慶は飯盛城内に家臣を居住させており、その場所として「河内国飯盛旧城絵図」（『美濃加納永井家史料』東京大学史料編纂所蔵）では、「三ヶ殿曲輪」との記述が同様に主要域から西側に枝状にのびる曲輪群に記されている（天野 2020）。この絵図は同時代史料ではないため慎重に扱う必要があるが、宣教師による記録と併せて考えるなら、長慶が家臣を居住させていたのが主要域から東西に枝状にのびる各曲輪群だった可能性は十分にあるといえる。これを踏まえて導き出された、飯盛城において三好長慶は山頂部の曲輪群を保有し、家臣団を山頂部から枝状にのびる各尾根の曲輪群に配置していたという見解は一定の説得力を持つといえる。このことから提唱している「中世城郭から近世城郭への画期は飯盛城にある」との大胆な指摘は、例えばいわゆる織豊系城郭にみられる枳形虎口がまだ飯盛城では確認できないといったような課題点はあるものの、城主の所有曲輪と家臣の配置された曲輪には確かに指摘通り階層性を読み取ることができる。このことから考えると、飯盛城は近世城郭への萌芽を読み取ることができる画期となる城郭のひとつと断言して差し支えないであろう。（實盛）

※元部員の坂元直哉氏・大下隆氏・江藤敬直氏・野間康三氏から資料の提供を得た。出土銅製品の鑑定は村瀬陸氏（奈良市教育委員会）の協力を得た。記して謝意を表したい。

本稿は、令和 4 年 7 月 23 日に「クローズアップ飯盛城 2022」で行った講演内容をその後の成果に基づき改稿したものである。

参考文献

岩田美奈子・江藤敬直・出口和美・藤原ひろみ 1969 「飯盛城址の研究―飯盛城東ノ丸一ノ曲輪調査報告―」『古流』第 4 号、四条畷高校地歴考古学クラブ。

大阪府立四條畷高等学校記念誌委員会編 2006 『畷百年史』大阪府立四條畷高等学校創立 100 周年記念事業実行委員会。

大阪府立四條畷高等学校「畷八十年史」編集委員会編 1987 『畷八十年史』大阪府立四條畷高等学校同窓会。

坂元直哉 1967a 「飯盛城」『日本城郭全集』9、大阪・和歌山・奈良篇、人物往来社。

坂元直哉 1967b 「河内飯盛山城」『城春』第 8 号、日本城郭近畿学生研究会。

坂元直哉 1968 「河内飯盛城」『城』第 47 号、関西城郭研究会。

四条畷高校地歴考古学部（坂元直哉編）1965 「飯盛城址の研究」『古流』第 1 号、四条畷高校地歴考古学部。

四条畷高校地歴考古学部（坂元直哉編）1966 「飯盛城址の研究（二）」『古流』第 2 号、四条畷高校地歴考古学部。

東の丸調査報告係（岩田美奈子・江藤敬直・出口和美・藤原ひろみ）編 1968 『飯盛城東の丸一の曲輪調査報告』地歴考古学クラブ。

山口 博・坂元直哉 1967 「河内飯盛城」『城と陣屋』13 号、日本城郭協会近畿支部研究会。

山口 博 1968 「河内飯盛城」『四條畷町の歴史』。

山口 博 1972 「中世の四條畷」『四條畷市史』第 1 巻、四條畷市役所。

山口 博 1990 『四條畷市史』第 4 巻、四條畷市役所。

李 聖子編 2020 『飯盛城跡総合調査報告書』大東市教育委員会・四條畷市教育委員会。